
復讐の神々

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐の神々

【Nコード】

N3737G

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

これまでに筆者は、復讐の神にならずにはいられないような理不尽な、或いは残酷な事件と言うものを幾つも見聞きしてきました。それらに対し、激しい怒りを覚えるものの、現実には何も出来ませんでした。しかし、それを物語にすれば、誰かに、何かを訴えられるかもしれない。或いは自らの憤懣を少しは解消できるかもしれない。これは、そういう「復讐」をテーマにした、半ノンフィクションの実験的小説です。是非ご一読を。そして、あなたも何事を感じ取ってくだされば幸いです。

第一話 無慈悲なる少年達

私は、この現代世界に於いて、唯一合法的に暴力を振るえるのは司法のみだと知っている。知っているが、いや、知っているからこそ、この作品を書く。演劇や戯曲や、時には小説には「デウス・エクス・マキナ」というものが現れる事がある。「機械仕掛けの神」と言う意味で、物語を強引に終わらせるために登場するのだが、私はこの作品内では、「復讐の神」である「デウス・ティシフォネ」と「デウス・アレクト」になるうと思う。ティシフォネは殺人復讐の女神、アレクトは怒れる復讐の神である。由来はギリシア神話から。もちろんこれは完全なる小説、物語、フィクションの世界である事をお断りしておく。作者の怒りは、おそらく多くの読者諸兄に共感いただけるものと信じる。ちなみに題材は全て実際に日本に起きた事件を元に書く。適当な用語で検索すれば元の事件は見つかると思う。

其の一 無慈悲なる少年達

「暇だのおマジよ」

頭を金髪に脱色して、そのまま適当に放置した髪をクシャクシャさせながら遼哉が唾を道端に吐いた。

「金ねーし、ババアも小遣いくれないしよ」

言いながら辰三もホープに火をつける。空になった箱をそのまま投げ捨てる。

「美樹らも遊んでくれないしな。何もすることねーな」

浩二が携帯を取り出して、誰にかけるでもなくクルクル回す。三人が歩く地元の道には何の代わり映えもない。向こう側からお洒落に決めたカップルが歩いてくる。三人の表情が卑屈な敵意に歪む。

と、更にその向こうからBMWが颯爽と走ってきて、三人の前を過ぎ去った。

「いいのー、俺もBMWぐれー乗りてーよ」

「年少上がりのクズの俺らが乗れるわけないな」

「ちっ、マジで組に入るぐらいしか浮き上がる道はないか？」

遼哉が転がっている空き缶を思い切り蹴飛ばした。カランカラン、と音を立てて空き缶は溝に落ちていった。辰三も蹴りたかったので舌打ちをする。

「あーあ、退屈だなあ、何かすることねーのかよ」

愚痴を垂れながら、三人は無為に歩いていった。やがて、小学校の前に辿り着いた。放課後遅い時間なので、静けさに包まれている。

「おい」

校内の飼育小屋が目についた浩二が言った。

「ああいう場所ってウサギとか飼ってるわな」

「あー？だからどうしたよ」

「ウサギ引っ張り出そうや」

「はあ？」

「ウサギでサッカーすんだよ、空き缶の代わりによ」

「へえ」

「楽しそうじゃん」

鬱屈の塊であった、この年少上がりの無職少年ら三人は、そう同意すると、小学校に勝手に入り込み、持っていたナイフで無理やり鍵をこじ開け、一匹のウサギの首根っこを掴んで引っ張り出した。嫌がり足をじたばたさせるウサギの耳を掴んで、三人は近くの公園へ辿り着いた。

「あそこに入れちまえよ」

それは、スケートボードの練習に使えるような、凹凸にへこんだコンクリートの形をした遊戯物だった。そこへ無造作にウサギを放り込む。ウサギは、外へ出ようと必死に両手両足を動かした。それを冷笑しながら見て、まず浩二が足で軽く蹴飛ばした。続いて、遼

哉が、これはかなり強く、踏み潰すようにウサギを蹴り落とした。

「お前えぐいのー」

と辰三は笑いながら、同じように足の甲の部分で強く蹴飛ばす。勢いが強く、反対のほうまで転がっていく。遼哉が喜びながら、そちらに走っていて、そこから上に上がろうとするウサギを容赦なく蹴り上げた。ウサギは苦悶の呻きをあげた。段々と動きが鈍くなってくる。三人は、一切構わず、面白がって、ひたすら蹴った。やがて、ウサギは動かなくなった。

「あー、あ、死んだぜこれ」

「ブーツに血がついちまった」

「死体どうする？」

「置いていたらいんじゃないかね？」

「人目につくと面倒だぞ」

「あー、あそこにちょうど袋があるし、石ごと入れてその裏の川に捨てようぜ、へっ」

浩二が拾ったずた袋に動かなくなった死体を足で入れ、その辺にある大きな石を数個ぶち込んで、そのまま裏手にある川に放り込んだ。

「つまんねーの。もう帰ろうぜ」

三人は何事もなかったかのように家路についた。

夜中、遼哉は目を覚ました。昼間の格好のままで、横に辰三と浩二もいる。

「なんだ？夢でもお前らと一緒にかよ。つかここどこ？」

「わからん。なんだよここは？」

三人は辺りを見回した。空はどんよりと灰色に染まっている。傾斜の浅い楕円形のコンクリートの中にいるようだ。

「ともかく、ここを出ようぜ」

三人は緩慢な動きで坂になっているコンクリートを歩きはじめた。登り終えた、と思ったとたん、遼哉の顔面に激しい衝撃が走った。

一回転して遼哉は元の場所まで転げ落ちた。続いて、辰三は鳩尾みぞおちに絶望的な衝撃を受け、その場に嘔吐しながら、やはり中央のへこみまで転げ落ちた。浩二は、胸板に強烈な打撃を受け、吹っ飛んでそのまま中央のコンクリートに頭を打ちつけ、昏倒した。唯一意識を保った遼哉は、鼻血を抑えながら、上を見上げて息を呑んだ。一つ目の巨人がこちらを覗き込んでいる。体の大きさは、遼哉の10倍以上はあるだろう。気配を感じ、反対側を振り返ると、同じような一つ目の仁王や阿修羅のような巨人達が、全員こちらを見据え、睨みつけている。遼哉は生きた心地もしない。すると、仁王が手を伸ばしてきた。逃げ場もなく、浩二が持ち上げられ、仁王の足元に置かれ、激しい勢いで蹴られた。そのまま反対のゼウス像のような巨人の足元に転がった。ゼウス像もまた蹴る。既に血まみれで、生きているとは思えない。遼哉の認識もここまでで、自身も持ち上げられ、数度もサッカーボールのように蹴られ、絶命した。辰三も同じように転げまわされ、ただのボロ切れと化した。三人の体から、青白い魂のようなものが抜け出た。ゼウス像が、それを掴んでこねくり回した。眩く輝く光の玉になった。それは、ゼウス像を離れ、遙か彼方の、冷たく暗い川に打ち捨てられているウサギの体内に入り込んだ。ウサギは甦った。さらに、ゼウス像が何事かを念じると、ウサギは元の飼育小屋に戻り、元気に飛び跳ねた。

第二話 卑劣なる欲望

今朝も地下鉄の構内は出勤のための会社員らでひしめき合っていた。一人の女性が押されながら電車を待っている。22歳の藍田泰子は今年の春から某広告会社の事務員として就職し、毎日朝早くから通勤ラッシュに揉まれて都内へと向かうのだが、最近はどう朝起きるのが苦痛で仕方なくなっていた。五月病、などではない。仕事は覚えだしているし、毎日が充実している。嫌なのは、満員電車に乗り込むことだ。自然、顔もうつむきがちになる。なるほど、ぎゅうぎゅう詰めになるのも嫌だが、時間にすれば10分ぐらいしかない。それ自体は何とか耐えられるのだが……。

なんとか女性専用車両に乗り込みたいのだが、一両しかないそれは、駅に着いた時点で蟻の這い出る隙間すらない。仕方ないので普通の車両に乗るのだが、二日に一度は痴漢にあってしまう。今日も怯えながらかうじて満員電車に乗った。案の定……。

吉田晴喜には人生に何の楽しみもなくなっていた。しがない窓際に族に成り下がり、家族にも相手にされず、趣味と言えば競馬と飲み屋通いだが、安月給ではそれも頻繁に行くわけにもいかない。鬱屈は溜まり、ストレスのはけ口もない。そんな48歳の中年の毎日の楽しみと言えば、若い女性を満員電車で触りまくる痴漢することしかなかった。駅内で常にメガネを光らせ、周りを見渡し、若くて綺麗な女性がいれば、即座に至近距離に迫り、後ろをキープする。後はもうやり放題だ。スカートの上から、時には中にまで手を入れ、匂いをかぎ、そして、目的の駅で降りた後は、トイレに立ち寄り、処理をした後に出社する。そのために早起きし、家を早めに出発すると言う体たらくだ。しめしめ、今日も可愛いOLがいるぞ……。

長年の痴漢の経験で、何をしても無抵抗な性格の女が分かるようになった。おとなしそうな子ほどいい。今日は吉田は、散々尻を触った後、その場で陰部を取り出して、こすりつけた。どうせばれないんだ。吉田の陰茎は激しく勃起した。息が荒くなる。

泰子は悲しみと苦痛で顔が歪んだ。今日の痴漢はしつこい上に、あろうことか陰部を当ててきた。それは感覚で分かる。恥ずかしさと屈辱と不愉快で、遂に目から涙がこぼれた。電車が止まって、逃げるように降りる。ハンカチを取り出して、泣きながら階段を上った。会社までの道もずっと目に涙を溜めていた。道すがら、直属の上司に出会った。

「藍田さん、おはよう。ん・・・？どうかしたのか？」

怪訝な顔で上司の市田さんが顔を覗きこんでくる。一瞬、全てを話そうかと思ったが、恥ずかしくて言えず、適当に誤魔化すしかなかった。市田さんは、心配そうな顔をしたが、それ以上は何も言わなかった。

翌日、朝起きる事が出来ず、泰子は遅刻してしまった。だが、空いている車両に乗り込むとき、安堵の気持ちを覚えた。

晴喜は、女性と性行為をしていた。何がどうなったかわからないが、唸るような体の女性と激しい行為に及んでいた。快感をむさぼる。よくわからないが、ともかく今はこれを楽しもう。女性は、もろに晴喜の好みだった。よし、フィニッシュを・・・と思った瞬間、周りを深く制帽を被った警察官のような人間に取り囲まれた。いきなり顔を殴打され、晴喜はのけぞった。

「なな、なんだお前ら！」

裸の春喜を警察官は問答無用に引きずっていく。突如風景が変わり、裁判所のような場所に連れて来られた。

「被告人、吉田晴喜、これまでに2299人の女性に対する痴漢行為に及んだ罪において、多数の女性の尊厳を侮辱し、精神を傷つけた事は許されない。よって、両手と性器の切断の刑に処することとする」

真正面の裁判官が高らかに宣言した。

「まま、待つてくれよ、何がなんだよ」

言った瞬間、後部のほうから歓声が湧き起こった。晴喜は後ろを振り返った。見れば、傍聴席には数多くの若い女性が拍手をしていた。晴喜は愕然とした。まさか、俺が痴漢した女の子なのか？思った瞬間、屈強な警察官に、手錠をかけられ、首輪をつけられ、被告人席の後ろの鉄のベッドに寝かされた。数千の刺すような視線に顔を上げられない。やがて、紙コップやら空き缶やらが怒涛の勢いで放り投げられてきた。

「傍聴席、自粛を願います」

裁判官が言う。投擲は収まった。晴喜は足を固定され、上半身は押さえつけられ、全く動けない。向こうから白衣の医師が二人ほどやってきた。

「ではこれより刑の執行を開始する」

声とともに、巨大な斧が、一気に晴喜の両腕に振り降ろされた。

「うぐわああー！！！！」

晴喜の手首は切断された。落ちた途端、ねずみが走ってきて、くわえて持つていってしまった。次に、医師が晴喜の陰茎を持ち、雑草でも刈るようにあつという間に切り取って、そのまま足元に捨てた。晴喜は痛みに悶絶し絶叫した。陰茎も同じようにねずみがかぶりついて持ち去っていった。

「これにて、刑の執行を終わる」

晴喜の意識は無くなった。

物凄い寝汗に目覚めた晴喜は、ゆ、夢だったか、と安堵した。思わず自分の下着に手を入れてみる。おかしい、と感じたのはその後

だ。手が動かない。夢の中のように切断されているわけではないのだが、動かないのだ。指も一本も動かない。やがて、病院に行った春喜に渡されたのは、障害者手帳であった。晴喜の手首より先は一生この先動く事はなかった。また、インポテンツになり、一切全ての性欲は無くなった。陰茎は排尿にしか機能しなくなった。晴喜は自らの未来に絶望し、自裁した。

第三話 慈悲無き死への鎮魂歌

腹が減った。栗原義純の意識は既に朦朧としている。全身の活力が失せ、もはや動く事もままならない。その両目には何も映らなくなっていく。人は死ぬ前に走馬灯のように人生の様々な場面を思い出すというが、栗原にはそれも許されなかった。煩っている肝臓は、死のその時まで歪み、栗原を苦しめた。栗原は10日も何も口にしていけない。世界でもっとも豊かな国であるはずの日本で、一人の男が餓死した。

「栗原さん、もう働けますよね？だいぶ元気になってますよね？」
民生委員の田原信雄は何度も言った。確かに、見た目は元気そうだし、まだ50代だから、働けない事もないだろう、と傍目には見えた。

「生活保護、と言うのは、働きたくても働けない人にだけ支給されるものなのです。栗原さんはもう大丈夫ですよ。」

栗原は力なく頷くしか出来なかった。本当は、まだ体力も回復していないし、肝臓の痛みも酷いのだが、何度も強く説得してくる田原に遂に折れてしまつて、終始無言でいた。すると、田原はすつと立ち上がり、壁に穴の開いている栗原の家を見渡した上で、

「では、来月より、生活保護は打ち切ります。またケースワーカーが書類を持ってきますので」

とだけ言つと、さつさと歸つてしまった。栗原は不安に苦しめられた。それまでに、体調は回復するだろうか。そして、こんな高齢の自分に何かしらの仕事が見つかるだろうか？精神の不安は肉体にも影響を及ぼす。なかなか栗原の体はよくなるらない。

「では、これらの書類はお預かりしておきます。明日にもハローワークに行ってくださいね」

市のケースワーカーの大槻邦明はそれだけ言々と家の中にも入らずに去っていった。あれから一ヶ月、本当に生活保護は打ち切られてしまった。貯金もろくに出来ない程度しか生活保護を受け取っていなかったのに、まだ、無職なのに、なんと言う酷い仕打ちだ、と大槻に言うと、求職の意思がある人には生活保護は出せません、としか言わなかった。栗原は黙るしかなかった。確かに、国に食べさせてもらっている、と言うような負い目があり、生来気弱なところもあって、強く自分の主張も出来ないのだった。頼る身内もない。栗原は途方にくれた。

日は過ぎ行くも、仕事は見つからず、食うや食わずの日々になってきた。日記に、こう書いた。

「おにぎりが食べたい」

やがて、水道、電気、ガスの全てが止まった。お金が無いので病院にも行けない。右腹の奥が熱を持って熱い。常に腹を壊しているか、風邪気味で悪寒に震えていた。家はボロボロで、幸い持ち家なので、家賃だけは払わないで済んだが、もう食費が無い。空き地の草までも口にしたが、却って体を痛め弱らせる結果にしかならなかった。生活保護さえ打ち切られなければ……。グルグル鳴るお腹を押さえ、栗原は飢餓感に苦しみぬいた。ある日、栗原は二度と動かぬ体になった。その孤独死すら、2週間後のケースワーカーの訪問まで誰にも知られなかった。

「田原さん、ノルマはどう？」

市役所の保健福祉事務所の課長の太田二郎が聞いた。

「はい、少しづつですが、確実に減らせています。目標の10%減まであと少しです」

「厚生労働省がうるさいからなあ。後、市の財政もちっとも改善しないし、少子高齢化で老人は増える一方だし。とにかく生活保護を

どんどん切つてくれ。何でもいいから働く意欲を見せた、で頼む」

太田の眼鏡の奥には情の欠片も無い目があった。

「ケースワーカーの大槻さんのほうが仕事上手ですね」

と言いながら田原はニヤリとした。そのまま、昼食のカツ丼をほおばりだした。太田はタバコを吸いに喫煙所に向かった。

「数字を合わせさえすれば何の問題も無い」

太田はそう呟くと、夏季休暇にはまたグアムにでも行くか、とか考え出すのだった。

やがて、栗原の死が大槻の手で発見された。マスコミが騒ぎ、三人も批判の矢に立ったが、知らぬ存ぜぬ、こちらは何も悪くないで通した。実際に、悪い事をしたなどと思っていなかった。自己責任だろ、国もうるさいし、そうだ、国が悪い、としか思っていなかったのだった。

大槻はある朝目覚めて驚いた。ボロボロの廃屋に寝ている。布団は破れ、家具は汚れ、壁には穴が開いてしまっている。狭い。ふと見ると、横には見覚えのある人が眠っている。田原さんだ。更にその向こうには、太田課長もいるではないか。慌てて、二人を起こし、何がどうなっているのか、問いただした。起きた二人にも全く何かなんだかわからない。

「ここは・・・見覚えがある。だが、どこか思い出せない」

思い出そうとすると、田原を物凄い頭痛が襲う。それを止めると収まる。

「ともかく、出てみよう」

太田が木製のしなびた扉を開ける。内側を開くには開いたが、その外に出れない。出ようとすると、透明な何かに阻まれる。拳で叩いてみると、厚いガラスのようなものがある。

「なんだこりゃ！？出れないぞ」

「ああー、冷蔵庫の中身は空っぽだ」

小腹が空いた、太り気味の大槻が大きな声を上げる。

「窓もだ。何かがある。壁の穴もだ。」

田原が絶望的に呟く。三人は焦った。椅子で、その邪魔する何かを壊してみようとしたが、無駄だった。椅子のほうが悪れた。他にも色々なことを試してみた。しかし、全く外には出れそうもない。諦めて、座り込んだ。この廃屋には食料何も無い。三人は何も食べられず、何も飲めず、次第に衰弱していく。それは例えようもない苦しさだった。口に入るものは何でも入れてみた。が、受け付けず戻すのみだった。どれぐらい時が過ぎたのだろう。遂に、田原の目の瞳孔が開いた。その瞬間、ここが何処だか思い出した。ここは、栗原さんの家だ。しかし、田原はそれを二人に伝える事もできなかったし、その必要も無かった。もう二人とも事切れていたからだ。その日のうちに、三人とも餓死した。

翌年、政権交代が起こり、福祉や生活を重視する政策が取られるようになった。ホームレスや、餓死者は一人も出なくなった。

あとがき

この実験的小説は、この三話で終える事にします。膨らませる事は幾らでも可能でしたが、實在の事件をもとに書く場合、いくつかの壁が存在することがわかったからです。一つは、名誉毀損になりうる、という事。二つは、解決策がどうも残酷になりがちだと言う事。読者の中には密かに眉宇を顰めていた方もいるかもしれません。三つは、規模が巨大になるという事。特に、餓死の事件の場合、最終的には国家および世界の経済や統治システムにまで言及せねばならず、また、人の道德や倫理といった根源の問題にも想いを馳せねばなりません。そこまでを小説という形で纏めきれるものではないと判断し、ともかくこの小説の連載はここまでにしておこうと思います。ある意味で適当に書けるようなテーマではなかった、という事でした。しかし、題材を集める時の方法として、これから同じように時事を追いかけていくための一つの手段として有益に感じました。作家はいかなる意味においても世間から乖離された存在足りえないですから。

ついでに、現在日本の時事の感想も残しておこうと思います。不景気が加速する中で、また目も当てられないような悲惨な事件が増えてきているように感じます。人はパンのみに生きるにあらずですが、同時に衣食足りて礼節を知る存在でもあるのです。昨今の犯罪白書を見えますと、一昨年辺りから少し総犯罪数は減少の傾向にあったのですが、これはまた上昇してしまうでしょう。さらに、自殺者数の数は10年以上年間3万人を超えています。バブル崩壊以降、この国に好景気だった時は一度もありません。何故なのでしょう。今年は衆議院解散総選挙があります。その時のために、一人ひとりが考えておく必要があると思います。

おまけに、最近ずっと気にかかっている詩を掲載して、あとがきを
を終えさせていただきます。

詩集「The novelist」より W・H・オーデン

《正しい者たちのなかで正しく、

不浄のなかで不浄に、

もしできるものなら、

ひ弱い彼みずからの身を以て

人類すべての被害を、

鈍痛で受けとめねばならぬ。》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3737g/>

復讐の神々

2010年11月12日16時40分発行